

第 2 章 ハマジの子から孫へ：1910 年前後～1940 年前後

領主アーメッド・ダーハの最期

ハマジの婚礼の日に処刑されたこの人物は、軍団を率いてザウイエト・ハイヌーン地方を治めていたが、モロッコのスルタンによってアウレフの代官に任命されたスリティン（Slitin）という人物とは激しく対立していた。エル・ハジ・アーメッド・ダーハとスリティンは従兄弟同士で、しかもアーメッド・ダーハの妻はスリティンの姉妹だった。フランス軍の司令官は時間をかけてアーメッド・ダーハを観察し、人物を良しとして、彼をウレド・ゼナン（Ouled Zennane）の大部族のカイド（訳注：イスラム法に基づく裁判権・警察権・徴税権を持つ地方官）に任命しようとした。アーメッド・ダーハは、家に帰ると、この吉報をすぐ妻に打ち明けた。しかし幸運は間もなく悲劇に変わった。スリティンの姉妹であるこの妻は、ことの次第をスリティンにばらしたのである。スリティンは、アーメッド・ダーハの名誉に嫉妬し、またアーメッド・ダーハがカイドになった後、対立していた自分に報復するに違いないと恐れおののいた。スリティンは一計を案じ、フランス軍の隊長に会いに行くと、嘘をでっち上げてアーメッド・ダーハを中傷した。

「あなたは、よりによって自分の寝首を掻こうと狙っている人物を任命するのか。やつは、ベルベル族（訳注：ローマ人の侵入以前から北アフリカに住んでいた先住民。固有のベルベル語を話し、コーカソイド系と言われる。）を自分の陣営に取り込んで、あなたを攻撃する機会を狙っているのに。やつこそフランスの最大の敵だ！」

経験の浅い司令官は、怒りの前に我を失い、すぐさま決断すると、アーメッド・ダーハを処刑した。



イメージ画像：アウレフ地方の城塞の廃墟（2002 年記者撮影）

話は遡るが、フランス軍がアウレフに進軍した時、部隊は初め、アーメッド・ダーハの陣営であるジェジド（Djedid）砦の東にキャンプした。フランス軍が恒久的な駐留基地の

候補地を探している時、件のスリティンはアウレフの真ん中に位置するウマナト (Oummanat) という場所を薦めた。この話の以前、ウーレド・ゼナン最大の名家であるアーメッド・ダーハの一族は二手に分かれて争っていた。結局、片方がジェジド砦を出て、このウマナトに新しく砦を築くことになり、アーメッド・ダーハの一派は元の砦に留まった。しかし、ウマナトの新砦の造成が始まるか始まらないかというところで、スリティンがフランス軍を唆したので、その土地は接収されてしまった。一方、アーメッド・ダーハの砦は彼の処刑後破壊され、解体された資材はウマナトの駐留基地の建設に使われた。この話は、アバシ・モハメッド (Mohammed Abbassi) という人が、彼の祖父から聞いたものである。また、アブデルマジド (Abdelmadjid) という人の母は当時まだ小さな少女だったが、私の妻メサウダに語ったところによると、彼女や他の女たちは、解体した砦のナツメヤシ材の梁を頭にのせて、ウマナトの新砦の建築現場へ運んだそうだ。彼女は、しばしば意地の悪い兵隊たちに殴られたそうである。なお、この新砦の壁の造り方はアウレフの他の古い砦とは違なり、練土を長方形に型抜きしたレンガが使われたが、これはこの地方では全く新しい手法だった。従来の建物では、手でこねた三角形のレンガを使っていた。砦は外見も他の建物よりずっと洗練されていた。内部の構造も、古い砦では敵が来襲した時に備え内部は幾つもの小さな家に分かれていたのに対し、新砦では、大きな一つの建物の周りに回廊が廻らされてあるだけだった。その代わり広い庭があり、外壁には銃眼が刻まれていた。

アーメッド・ダーハの処刑について、人々は彼は斬首されたと信じていた。しかし、軍に駆り出され、ラクダでアーメッド・ダーハを運ぶ仕事をしたブカイディール (Bkaidir) という男は、彼は銃殺されたと証言している。二人のアラブ兵がフランス兵に伴われてやって来て、ブカイディールは、アラブ兵と一緒にアーメッド・ダーハを乗せたラクダを引いてアウレフの東の方角へ向かった。だいぶ長く歩いた後、兵隊はラクダを座らせるように言い、ブカイディールにそこで待っているよう命じた。兵隊は両脇からアーメッド・ダーハを挟んで歩き出した。彼らの姿はグール (gour) と呼ばれる丘 (訳注：風化丘) の後ろに消えた。ほどなく一発の銃声が響き、ブカイディールは何が行われたのかを知った。少しして兵隊二人が戻って来た。三人でアウレフに歩いて帰ったが、誰も一言も発せず視線さえ合わせようとしなかった。この処刑でスリティンの前に敵はいなくなった。彼はフランス軍の隊長に取り入り、隊長はスリティンをフランスに忠実な人物と判断してカイドに任命した。しかし実際にはスリティンは酷い圧政をひき、彼の在任中、世には不正が蔓延った。しかし、報復を恐れて不平を唱える者はなかった。スリティンには子飼いのグーギ (Gougi) という家来がいた。この男は鶏・羊・デーツ・小麦といった住民の財産を調べて上げてスリティンに報告し、スリティンはそれらを、好きな時に好きなだけ徴発した。

7 年の間スリティンの独裁が続いたが、後ろ盾だったフランス軍の隊長が離任したのを潮に、スリティンに敵対する土地の名士たちが結集し、後任の隊長に告発を行った。この告発は容れられた。新しい隊長は、ある地元の祭りの機会に、スリティンを更迭し後任を任命した。新任者は名をシディ・オスマン・ベニ・メルアンヌ (Sidi Othmane Béni Merouane)

と言い、北部出身の古強者だったが、引退後はアウレフに住んでいた。シディ・オスマンは 2 年 3 か月後に亡くなった。後を継いだのはスリティンの従兄弟でウマナト出身のバカディ (Bakadi) だったが、僅か 7 か月で亡くなった。バカディの後は、彼の息子のモハメッド・アブダラー・ベン・バカディ (Mohammed Abdellah Ben Bakadi) が継いだ。モハメッド・アブダラーの治世は、フランス占領時代の中で最も長く 40 年続いた。この後は、モハメッド・アブダラーの兄弟のモハメッド・ベン・バカディ (Mohammed Ben Bakadi) が継いだ。1 年半で辞任した。モハメッド・ベン・バカディは謙虚な人柄で人気があり皆から尊敬されていた。彼は在任中良いことしかしなかった。1957-1962 年間はシッド・アーメッド・エル・ベクリ (Sid Ahmed El-Bekri) が就任した。以上がフランス占領時代にウーレド・ゼナン部族を治めた合計七人のカイドである。(訳注：アーメッド・ダーハを入れて七人)

元奴隷ハマジの子供たち

ハマジの航跡に話を戻そう。結婚の後、彼は懸命に正直に元主人の農園で働き、穀物倉庫の鍵を預かるまでになった。また、地元社会の中での評価も次第に獲得していった。全く模範的な人物だった。ハマジとファトマの間には、まず娘のゾーラ (Zohra)、次に息子のモハメッド (Mohammed)、次女のアイシャ (Aïcha)、最後に次男のアーメッド (Ahmed) が生まれた。しかし、この末子のごく幼いうちに酷い疥癬で命を落とした。1911 年ごろのこと、ハマジは仕事を探すため、ムザブ (Mzab) の町 (ガルダイア地方) に行くことにした。彼は徒歩で旅立った。その少し後、ハマジの妻の兄弟、モハメッド・ベン・カドゥール (Mohammed Ben Kaddour) も仕事を求めて北部へ旅立った。途中モハメッドはガルダイアに寄ったが、そこでハマジが重い病に倒れ亡くなったのを知った。モハメッドは義理の弟の葬儀に立ち会った。当時はろくな通信手段がなく、アウレフの家族がハマジの死を知ったのは丸 1 年たった後だった。モハメッド・ベン・カドゥールはといえば、その後も北へ旅を続け、更に海を渡り、第一次大戦前のフランスに到着した。彼からは長いこと音信がなく、人々は彼を忘れて行った。モハメッドは第二次大戦もフランスで迎え、その後もかの地を離れることなく、初めてアウレフに戻ってきたのは 1973 年になってのことだった。彼は 6 か月故郷に滞在した後またパリに戻った。



最近のはじ家の農園（2002 年記者撮影）

ハマジの子供たちの結婚、孫たちの誕生

ハマジの長女ゾーラは、1927 年ごろアウレフに駐留していたフランス軍の下士官と結婚した。この下士官の名はルマン（Leman）と言った。彼は 1930 年ごろ、妻を正式には離婚しないままアウレフを去り、妻には一人息子のモハメッドが残された。この元夫がアウレフに構えていた家は、当時としては最も大きく立派なものの一つだったが、冬は暖かく、夏の酷暑の時は涼しく快適だった。住居は大きな庭に囲まれており、西側がアウレフの町、東側がナツメヤシ農園に面していた。ルマンは遺言書で次のように言い残した。曰く、「私の財産は私の息子とその母に譲る。私の妻はこの財産によって生活し、息子の教育に当たること。私の息子が死亡した場合は、全ての財産は彼の母のものとなる。私の妻が再婚した場合は、彼女は全ての権利を失い、全部が息子のものとなる」と。

ハマジの一人息子モハメッドは成長し、1934 年ごろ結婚した。相手は、ナジーマ (Nadjma)

という名のとても美しい娘で、マーマール (Mâamar) というハラティンの家の出だった。モハメッドの姉は、この縁組をととても喜んだ。彼女には、元夫のフランス軍下士官の残した資産あったので、あちこち奔走して盛大な式の準備を整えた。しかし、見た者の話によると、新婦は激高しやすく不安定で神経質な性質だったという。夫婦の仲はほどなく破綻し離婚が言い渡された。ところが、離婚した後になって、この元妻が妊娠していたことが分かった。彼女は、モハメッドにとって最初の娘を生み、この子はファトマ・ベント・モハメッド・ベン・ハマジ (Fatma bent Mohammed ben Hamadi) と名付けられた。モハメッドは同じ年のうちに、ハウダ (Haouda) という家の娘ムーベリカ (Moubérika) と再婚した。今度の新婦は物静かでやさしく聡明だったので、すぐに婚家に溶け込み、モハメッドの姉妹のゾーラやアイーシャ、前妻の娘のファトマなど皆に慕われた。ムーベリカは、家族の誰かが悩んだり困ったりしている時に頼りになる天使のような存在だった。一家は一つ屋根の下で幸せに暮らしていたが、モハメッドは、ある時ラクダを一頭買い、ささやかながら交易をするために近隣地域に旅するようになった。遠出する時は、アハガール (Ahaggar) (タマンラセット地方)、アズグール (Azguer) (ジャネット地方)、イリジ (Ilizi)、ザウイェト・シディ・ムーサ (Zaouiet Sidi Moussa) の市場まで行った。この商売の利益で彼は、姉のゾーラの家近くの土地を買い、自分の新しい家を建てて独立した。

モハメッドの妻のムーベリカが妊娠した。お産は難産となったが、その日は偶然、メッカ巡礼月で一番神聖なアラファトの夜 (訳注：イスラム暦第 12 月＝巡礼月 9 日目のアラファト山巡礼) に重なった。呪術師は、難産は小悪魔が産道で邪魔しているせいだから、赤ん坊が通れるようにするには、ロバの蹄を燃やして煙を妊婦に嗅がせればいいと言った。当時人々は、呪術師の言うことを全面的に信じたものである。夫のモハメッドは、闇夜の中、町はずれの廃墟へ出かけて行った。ここは、村人がゴミや動物の皮、ロバの蹄の端やその他諸々の汚いものを捨てる場所で、悪魔が住んでいると信じられており、普通の人は夜立ち入るのを躊躇う場所だった。乏しい明りの中、未来の父は、「悪魔から守りたまえ」とアラーにしきりに祈りながら、暗がりの中を手探りでロバの蹄を探した。彼の指先に何か三日月形の物体が触れた。それが目指すロバの蹄だった。これで妻と子供は助かると思い、モハメッドは飛ぶようにして家へ帰った。一日の最後の礼拝 ーサラート・エル・アイーシャー ーの後、元奴隷ハマジの孫息子、つまり私の誕生が告げられた (訳注：1937 年 9 月 27 日)。一家に喜びが満ちた。祝福された子。ちょうど巡礼月に生まれたので、この子はアーメッド・エル・ハジと名付けられた (「ハジ」は、ムスリムの五つの義務のうちメッカ巡礼を果たした者へ贈られる名誉ある名)。ムーベリカは、この 5 年後娘のゾーラを生み、更に数年後男の子を生んだが、この子は死産だった。以降私の母は子供を生んでいない。

父モハメッド出稼ぎに出る

私の幼少期、父は交易の仕事のため遠方へ行き、アウレフを長期間不在にすることが多かった。母は家で独り、私や妹、それに私の母違いの姉の養育に当たった。母違いの姉については、彼女の母が再婚した時、私の父は、元妻がこの娘が連れて行くのを許さなかつ

たのである。前妻の再婚相手は、私の実母の兄弟で名をバヤ・ハムード (Baya Hamouda) と言った。彼らには息子が一人が生まれたが、一家はタマンラセットに居を構え、何年もアウレフには戻らなかった。私には、父が商用の旅から戻って来た時の記憶が二度ほどある。誰かが父が帰ってくると知らせに来て、家族全員で急いで迎えに行った。アイーシャ叔母さんが私を背負って走り、うちの農園の西で父を迎えた。この方角からすると、この時はトゥアットから帰ったのだと思う。叔母は私を父に渡し、父は私を抱いて頬ずりした。父の後ろに轡をかまされたラクダが立っていた。なお、地元の習慣として、長いこと不在だった旅人の帰還を知らせてくれた人には、旅人の家族が贈り物をするようになっていた。

二度目は、タマンラセットから帰った時で、父の叔母のアイーシャ・サルヒア (Aicha Salhia) が一緒だった。この時はアウレフの東で出迎えた。大叔母はラクダに乗り、父は降りてラクダを率いていた。ラクダの両脇には重そうな荷物が結わえつけられていた。いつものように家族総出で出迎えに行ったが、私はこの時もアイーシャ叔母さんにおぶわれていた。皆徒歩だったが、家からだいぶ遠くまで来ていたように思う。遠くの方に、ラクダに乗った人と、その前に立って歩いてくる人が見えた。叔母は背中私の重さのせいで他の者に遅れて走っていた。確か、先頭を駆けていたのは、従兄弟のモハメッドと、彼の友達のアーメッド・アブダラー (Ahmed Abdallah) だったと思う。再会の喜びの言葉が交わされ、二人の旅人と一頭のラクダを囲んで皆で家に帰った。父はラクダを座らせて荷物を下ろし、男たちがそれを家の中に運び込むのを手伝った。これもまた習慣であるが、旅人は帰還後、家族の中で 3 日間過ごした後でないとはならない。この 3 日間の期日を守らないと不幸が訪れるという迷信があったのだ。旅人が戻ると、友人や隣人たちが土産話を聞きに集まって来た。旅人の話を聞くより他に、当時よその土地の出来事を知る術はなかったのである。紅茶の盆を大勢の男たちが囲み、少し離れた中庭では叔母のゾーラの周りにおしゃべりな女たちが輪を作っていた。私はとていば、家を抜け出してラクダと遊ぼうとした。しかし、この動物は子供が気に入らなかったようで、私を前足で一蹴りした。私が凄まじい泣き声を上げたので、全員が集まって来た。幸い大したことにはならず、顔に軽い傷を負っただけで済んだ。